

「幕之内之習」小考

山中 玲子

葛野流大鼓の手附である『拍子口之巻』(能楽研究所蔵。著者不明。江戸中期)は、單なる手附にとどまらず、離子事全般にわたる多くの習事について詳述した書である。記載項目が豊富なだけでなく、著者の師匠筋にあたるらしい人物の所持本を写したり、そこに記された古い演出や打ち方について当代の役者に尋ねて吟味するなどしており、江戸時代初期から中期にかけての演出の変遷を考える上で興味深い資料だが、その「幕之内之習・幕之外之習」の項に次のような記事がある。

幕之内之習トハ、昔ハ横幕ニテ上下短ク掛シ也。脇幕ギワニカカリ、或ハ次第之有能ヲ名乗ニスルカ、又ハ名乗之跡に次第謡之事之有能ヲ次第謡ナシニスルカ、何ゾ替リタル事之有時ハ、脇幕ギワニテうしろ向キキビす之方を見する古法也。又仕手之面或は装束などニテ夫々ニ位之替ル事ヲ心につくミ、次第ニテも一声ニテも可レ打事肝要也。
〔幕之外之習〕の記事省略

又休甫書物ニハ、昔ハ鏡幕、布にて横ニ縫候て大夫面のミゆる程にあげ、下ハ足のよくミゆる程ニ短クして是ヲ女の脚布ニたとへたり。離子方より大夫之衣装ヲ見て、たとへバ赤頭・白頭・面の様子などを見て、其位之程ニはやす事也。是ヲ幕之内之習ト云也。併当代ハ鏡幕綾(つら)綿(つ)ニテ上下一ばいニ引廻ス故ニ、其差別曾てしれがたく候。

(句読点濁点山中、以下も。休甫は著者の師匠筋の一人で、他の箇所の記事によると、葛野好雪―葛野流三代目を継ぐ筈だったが病気で京都に隠居した人物―の教えを受けている。)

幕のことは後述するが、右の記事からは、室町末期の離子伝書に多く見える「色の離子」「面による離子」が、この時代に事実上消滅していることが判る。「イシヤウノ色ヲ以テ序破急をしる」(広大本『宮増伝書』所収、笛彦兵衛系伝書)ことや、「大夫上手なれば、ふりよニ面白キ面ヲかけ候事可レ有。其時ハ

習ヲすて面ヲ本と拍子(はし)候事、第一の習也。」「

(同上)といった臨機応変の対応が、本書の著者や師匠の休甫の時代(おそらく、さらにその師匠の好雪の時代)には、すでにできなくなっていたのである。但し、その原因が揚幕の変化だというのは鵜呑みにできない。この時代は、咄嗟に出しぬいたりそれに追いついたりという「上手の意地」を一先ず措いて、なるべく安全に、失敗のないようにという方向で演出が固まってくる時代である。同書にもその傾向の見てとれる記事が多いが、一例をあげれば、神楽について

舞二段目之跡ニ神楽返リト云、笛ニ手在。

昔ハ是迄位閑ニして右之手ヨリ位ヲ替、さらさらと舞ヲ詰テ急ニ離子申候由。併右之打様あまり不レ宜事なり、大事之離子ヲ俄ニ詰候て舞(舞)コけ申候てハ不出来ニ成(成)べしと、(葛野)日榮(日)・与左衛門(左)・惣右衛門(右)・新九郎(新)・小左(小)右衛門(右)・長右衛門(長)、右之衆中相談之上ニテ、兎角じねんニ相詰候事可レ然ニ相極リ申候。夫故今程ハいづれ之流ニテも舞ニ成て急ニハ詰不レ申候。

との記事がある。改定の事情や人名など、100%信じるのは危険だろうが、少くとも、多くの伝書に見える「神楽返(舞に直つて段をとった後のヲロシ)のあと急に位を進める」という演出が、この時代にもっと安全でミス

の少い現行の形に変えられていたことだけは、確かである。鴻山文庫にある『随形』も日榮や幸月軒等の説を伝えた書だが、そこには、シテの足拍子を合図に段をとる呂中干舞についてさえ、「りょかんの段取極て御座候。是又わがままに舞申候事有間敷事ニ御座候」と、定寸法を強く打ち出す発言が見られる。このような状況から考えれば、幕が上がる直前にシテやワキの様子を見て、いきなり離子を変えようということは、幕の様式に関わらず最も避けるべきことのはずである。幕が長くなつて見えないから、というのは、後で結びつけた言訳にすぎないだろう。

それでは、昔は揚幕が横幕（横に縫い合せた幕）で上下に隙間が空くように張られていたというのでは全くのデタラメかと言うと、これがそうでもないらしい。『隣忠秘抄外編』は、「定紋のついた麻の横幕を裾を5〜6寸空けて張り、待謡の間に後シテが幕際に立つのを合図に離子方が床几にかかると古法だったが、今の「緞子縮珍にて立幕」ではシテが見えないので判らない」と記し、さらに、今も勅進能等では麻の横幕を用いること、師である渋谷道修の京都真葛原一代能（元禄5年秋）の時は横幕を鏡の間に張り廻したことを紹介している。また、金春安照の伝書にも「橋懸りの幕、横幕によきと云儀あり。

表し物有之。口伝。」と、短いながら記述がある。一方、桃山後期の観能図として著名な『観能図屏風』（八曲一双。神戸市立南蛮美術館蔵）では、能舞台の絵の部分に橋掛までは描かれていないが、ちょうど揚幕があるはずの所から舞台裏にかけて、鶴丸の紋の入った浅葱の幕が張られている。これらの例を見た上で読み直すと、禪鳳の『反古裏之書』にある「幕を揚ぐるには、長き裾を着たる者、両の脇へ退きて、雁股成竹にて、幕の裾より巻きあげて、上の繩まできりきりとあぐる也。」という記事も、今のように下まで垂れた幕をはね揚げるのではなく、床から何寸か離れた幕をさらにくるくる巻き上げる形としてなる以前の時代、『拍子口之巻』で言うような幕が普通に用いられていたというのは、案外真実かもしれない。（因みに、幕末の弘化勅進能では、揚幕も今と同じ形になっていることが、絵巻から知られる。）

舞台の様式にしる個々の技法にしる、大きく変化して現代の形にかなり近づいてくるのが、江戸時代の初期から中期にかけての頃だろう。その時代に書かれ、しかも実際の演奏の手控えとして用いられる手附類は、現代の舞台上の演技と、そこからは想像もできないような室町期伝書の記述との間をつなぐ、貴重な資料である。（法政大学能楽研究所員）